

## 平成5年度日帰り人間ドックの成績

厚生連滑川総合検診センター

小川 忠邦, 川口 京子, 松井 規子,  
岸 宏栄, 大原 千津子, 保井 陽子,  
川岸 智美, 川原 隆徳, 谷川 秀明

### はじめに

滑川総合検診センターにおける日帰り人間ドックは15年目を迎え、農協組合員や職員の検診方式として定着し、平成2年度より開始した高岡検診センターと共に、受け入れ能力限度一杯の業務を行ってきている。平成5年度からは、今話題のC型肝炎のスクリーニングを目的としてHCV抗体の測定と、糖代謝異常の補助診断としてHbA<sub>1c</sub>の測定とを取り入れた。両者共全国的に、検診やドックに導入する施設が多くなってきているものである。一方血液型と、HBs抗原陽性者に行なってきたAFP測定とを廃止した。また便潜血の回数を3回から2回に減らした。以下平成5年度の成績を、従来と同じ方式<sup>1)</sup>に従って前年度と比較検討しながら記述する。なお発見癌など確認されたものについては、それぞれの項目の中で記載した。

### 成績

#### (1) 受診状況

表1に年代別性別受診状況を示す。受診者総数は男4779人、女2925人、合計5404人とはほぼ前年度並み(94人、1.8%増)であった。男女別では男45.9%、女54.1%となり、やはり前年度とほぼ同じ傾向であった。年代別では従来と同じく、40才台から60才台までが全体の86.5%と大半を占めた。このうち例年70才以上の受診者が極端に少なくなるのは、地元

市町村の老健や受診者意識の変化など、色々な理由によるものと思われるが少し気になるところであり、今後調査を行なって、できる限りこの年代層の受診者を増やしていきたいと考えている。その理由として挙げられるは、①高台になるほど有病率が高く、検診効率が挙がること。②発見されたりリスクファクターや異常所見が、加齢と共にどのような疾患や異常へ移行し結びついていくかを確認できること。③非常に多い継続受診者を長年月にわたって追跡し、検診データの意義を実際の健康度との関連で把握できる貴重な資料が得られるであろうと思われること。④毎年積み重ねられる膨大な個人の検診情報をデータベースとして活用するには、長い年月の時間的経過の要素が是非必要であること。などである。

農協別では、入善町農協が前年度と同じく1952人で、全体の36.1を占め、ついで富山市(15.6%)、黒部市(10.6%)、滑川市(9.7%)、

表1 年代別・性別受診状況

	男	女	計	%
～29才	43	18	61	1.1%
30～39才	238	216	454	8.4%
40～49才	737	908	1645	30.4%
50～59才	653	924	1577	29.2%
60～69才	660	793	1453	26.9%
70才～	148	66	214	4.0%
計	2479	2925	5404	
%	45.9%	54.1		

魚津市（5.2%）、上市町（4.4%）、朝日町（3.9%）、大沢野町（3.5%）の順になっている。

## (2) 総合判定

表2は、年代別性別総合判定結果を示したものである。異常なし、差し支えなしと判定したものは、男10.9%、女13.8%、平均12.5%で、ほぼ前年度並みであった。今回は前述のように、検診項目にHCV抗体とHbA<sub>1c</sub>が増え、眼科医師の交代があったが、全体の判定には大きな影響はみられていない。

## (3) 呼吸器

表3に示す通りで、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男10.9%、女4.8%、平均7.6%で、前年度と比べると女性でやや増加したが、全体としてはその内容、傾向は余り変わっていない。今回から3年以内の再受診者については、胸部X線写真はすべて前回との比較読影を行ない、見落としを少なくすると共に、不要な要精査の減少に努めた。この中で呼吸器異常の大部分を占める胸部X線写真の異常内容についてみると、①肺異常陰影としたものは70名（男41、女29）、1.3%と前年度と全く同じく、このうち要精査は22名（男14、女8）で、この中から男性2名の肺癌が発見された。ただしこのうち1名は、前年度発見肺癌の術後再発（後に死亡）である。もう1名はすでにT<sub>2</sub>N<sub>2</sub>M<sub>0</sub>-Stage IIIaの進行

しを除く異常所見者は、男10.9%、女4.8%、平均7.6%で、前年度と比べると女性でやや増加したが、全体としてはその内容、傾向は余り変わっていない。今回から3年以内の再受診者については、胸部X線写真はすべて前回との比較読影を行ない、見落としを少なくすると共に、不要な要精査の減少に努めた。この中で呼吸器異常の大部分を占める胸部X線写真の異常内容についてみると、①肺異常陰影としたものは70名（男41、女29）、1.3%と前年度と全く同じく、このうち要精査は22名（男14、女8）で、この中から男性2名の肺癌が発見された。ただしこのうち1名は、前年度発見肺癌の術後再発（後に死亡）である。もう1名はすでにT<sub>2</sub>N<sub>2</sub>M<sub>0</sub>-Stage IIIaの進行

表2 年代別・性別総合判定

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	5	3	30	32	44	70	26	51	11	22	3	1	119	4.8%	179	6.1%	298	5.5%
差し支えなし	5	1	15	27	45	84	34	72	49	37	2	4	150	6.1%	225	7.7%	375	6.9%
要再検	1		3	7	10	11	5	14	7	14		1	26	1.0%	47	1.6%	73	1.4%
要経過観察	16	7	113	69	298	355	252	345	218	304	60	11	957	38.6%	1091	37.3%	2048	37.9%
要精密	14	6	62	56	199	245	160	231	176	175	35	20	646	26.1%	733	25.1%	1379	25.5%
要治療		1	7	17	41	68	43	39	11	22	4	1	106	4.3%	148	5.1%	254	4.7%
治療中	2		8	8	100	75	133	172	188	219	44	28	475	19.2%	502	17.2%	977	18.1%
合計	43	18	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2925		5404	
有所見者数	33	14	193	157	648	754	593	801	600	734	143	61	2210	89.1%	2521	86.2%	4731	87.5%
%	76.7%	77.8%	81.1%	72.7%	87.9%	83.0%	90.8%	86.7%	90.9%	92.6%	96.6%	92.4%						
合計 %	47	77.0%	350	77.1%	1402	85.2%	1394	88.4%	1334	91.8%	204	95.3%						

表3 呼吸器

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	38	16	225	209	697	880	579	875	523	715	98	55	2160	87.1%	2750	94.1%	4910	90.9%
差し支えなし					4	1	11	8	22	19	13	5	50	2.0%	33	1.1%	83	1.5%
要再検	1		4	2	6	7	6	16	13	9	2	2	32	1.3%	36	1.2%	68	1.3%
要経過観察	2		7	2	22	17	47	21	80	41	30	3	188	7.6%	84	2.9%	272	5.0%
要精密	1		2	2	5	2	6	3	11	6	3		28	1.1%	13	0.4%	41	0.8%
要治療									1				1	0.0%			1	0.0%
治療中	1			1	3	1	4	1	10	3	2	1	20	0.8%	7	0.2%	27	0.5%
合計	43	16	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2923		5402	
有所見者数	5		13	7	36	27	63	41	115	59	37	6	259	10.9%	140	4.8%	409	7.6%
%	11.6%		5.5%	3.2%	4.9%	3.0%	9.6%	4.4%	17.4%	7.4%	25.0%	9.1%						
合計 %	5	8.5%	20	4.4%	63	3.8%	104	6.6%	174	12.0%	43	20.1%						

肺癌で、喫煙者であり、喀痰細胞診でもD判定(classIV)であったが、1年前のX線写真では殆ど異常を指摘できず、肺癌早期発見のむづかしさを改めて示したものと見える。その他は陳旧性炎症5名、胸膜肥厚2名、気管支拡張1名、肺のう胞1名、骨陰影1名、異常なし8名、受診せず2名となっている。要精査以外の肺異常陰影は、異常陰影の軽微なものや、前年度との比較読影などを参考にして、要再検または経過観察としたが、この中から肺癌は発見されていないようである。②肺門影増大としたものは64名(男38,女26)、1.2%で、前年度よりやや増加した。このうち要精査は13名(男11,女2)であったが肺癌は発見されず、異常なし11名、受診せず2名であった。なお65才女性で右肺門部に明かな腫瘤様陰影がみられ肺腫瘍疑としたが、生検の結果サルコイドーシスであった。③肺門理増強としたものは25名(男12,女13)で、前年度より減少した。このうち要精査は2名(いずれも女性)で、その結果は異常なし1名、受診せず1名となっている。以上、肺異常陰影、肺門影増大、肺門理増強の三者を合計すると159名(男91,女68)で、このうち要精査は37名(男25,女12)で、この中から2名の肺癌(うち1名は再発)が発見された。

その他の呼吸器異常では例年通り、換気機能異常が4.9%と最も多く、その他塵肺症16名、肺気腫14名、間質性肺炎8名、陳旧性肺結核8名などが若干みられたのみである。

一方喀痰細胞診は、受診者318名中回収された検体は269名(回収率84.6%)で、ほぼ前年度並みであった。その成績は肺癌学会判定基準<sup>2)</sup>に従って、A判定(材料不足)15、B判定(異常なし)252、C判定(要再検)1、D判定(要精査)1であった。D判定の1名は前述の肺癌例であり、C判定の1名は再検でclass I、肺野に小結節影あり follow up とのことであった。

#### (4) 循環器

表4に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は男28.4%、女26.8%、平均27.6%で、前年度より男性でやや増加した。異常者の内訳をみると、先ず高血圧(疑も含む)は表5に示す通り、男21.2%、女19.2%、平均20.1%と前年度よりかなり増加した。このうち一過性の高血圧と思われる要再検者を除くと17.5%となる。高血圧の中で治療中の者は51.4%(男50.7%、女52.1%)で、ほぼ前年度並みであった。これを年代別にみると、39才以下3.5%(男4.3%、女2.6%)、40才台11.4%(男13.4%、女9.8%)、50才台23.8%

表4 循環器

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	33	17	194	192	505	760	360	597	296	406	56	22	1444	58.2%	1994	68.2%	3438	63.6%
差し支えなし	7		27	10	104	27	87	42	86	63	19	4	330	13.3%	146	5.0%	476	8.8%
要再検			3	3	11	18	7	25	13	23	6		40	1.6%	69	2.4%	109	2.0%
要経過観察	2	1	7	8	69	64	94	139	118	154	33	18	323	13.0%	384	13.1%	707	13.1%
要精密			3	1	5	4	12	13	9	11	4		33	1.3%	29	1.0%	62	1.1%
要治療			1		4	4	2	4		1			7	0.3%	9	0.3%	16	0.3%
治療中	1		3	2	39	31	91	104	138	135	30	22	302	12.2%	294	10.1%	596	11.0%
合計	43	18	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2925		5404	
有所見者数	3	1	17	14	128	121	206	285	278	324	73	40	705	28.4%	785	26.8%	1490	27.6%
%	7.0%	5.6%	7.1%	6.5%	17.4%	13.3%	31.5%	30.8%	42.1%	40.9%	49.3%	60.6%						
合計%	4	6.6%	31	6.8%	249	15.1%	491	31.1%	602	41.4%	113	52.8%						

(男24.7%, 女23.2%), 60才台29.2% (男30.8%, 女27.9%), 70才以上38.3% (男34.5%, 女47.0%) となり, 男女共全年代を通じては前年度より増加している。

高血圧以外の循環器異常は表6に示す通りである。高血圧と関連の深い心肥大, 心負荷

は男16.4%, 女5.6%, 平均10.6%で, 前年度より男性で増加した。その他虚血性心疾患(疑) 4.0% (男2.5%, 女5.3%), 上室性並びに心室性期外収縮2.5%, 右脚ブロック2.5%, 心房細動0.4%, その他7.5%などが例年通りみられたが, この中で期外収縮は前年度より

表5 高血圧

	~29才		30~39才		40~49才		50~59才		60~69才		70才~		合 計						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%	
差支えなし																			
要再検			3	3	13	17	8	32	20	33	9		53	2.1%	85	2.9%	138	2.6%	
要経過観察		1	6	2	51	41	78	85	73	80	20	10	228	9.2%	219	7.5%	447	8.3%	
要精密																			
要治療					4	4		4		1	1		5	0.2%	9	0.3%	14	0.3%	
治療中			3		31	27	75	93	110	107	21	21	240	9.7%	248	8.5%	488	9.0%	
計		1	12	5	99	89	161	214	203	221	51	31	526	21.2%	561	19.2%	1087	20.1%	
%		5.6%	5.0%	2.3%	13.4%	9.8%	24.7%	23.2%	30.8%	27.9%	34.5%	47.0%							
合計%	1	1.6%	17	3.7%	188	11.4%	375	23.8%	424	29.2%	82	38.3%							

表6 高血圧以外の循環器異常

	心肥大		心負荷		虚血性心疾患		心房細動		期外収縮		右脚ブロック		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	190	37							44	47	78	44	90	53
要再検														1
要経過観察	187	107	31	118	2				17	18	11	3	64	103
要精密	23	13	4	13	4	1	2	3					12	7
要治療							1							2
治療中	6	8	26	23	14	2	2	1					38	35
計	406	165	61	154	21	3	65	69	89	47	206	199		
%	16.4%	5.6%	2.5%	5.3%	0.8%	0.1%	2.6%	2.4%	3.6%	1.6%	8.3%	6.8%		
合計%	571	10.6%	215	4.0%	24	0.4%	134	2.5%	136	2.5%	405	7.5%		

表7 上部消化管

	~29才		30~39才		40~49才		50~59才		60~69才		70才~		合 計						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%	
異常なし	31	11	190	188	521	763	423	758	401	611	82	46	1648	67.7%	2377	82.2%	4025	75.0%	
差支えなし				1		4	9	5	8	4		1	17	0.7%	15	0.5%	32	0.6%	
要再検																			
要経過観察	1	1	15	6	77	47	92	54	107	65	32	7	324	13.3%	180	6.3%	504	9.5%	
要精密	7	1	29	14	111	78	101	87	111	93	23	7	382	15.7%	280	9.7%	662	12.5%	
要治療			1		6		7						14	0.6%			14	0.3%	
治療中			1	1	15	3	9	9	18	7	6		49	2.0%	20	0.7%	69	1.3%	
合計	39	13	236	210	730	895	641	913	645	780	143	61	2434		2872		5306		
有所見者数	8	2	46	21	209	128	209	150	236	165	61	14	769	31.6%	480	16.7%	1249	23.5%	
%	20.5%	15.4%	19.5%	10.0%	28.6%	14.3%	32.6%	16.4%	36.6%	21.2%	42.7%	23.0%							
合計%	10	19.2%	67	15.0%	337	20.7%	359	23.1%	401	28.1%	75	36.8%							

増加した。

### (5) 上部消化管

消化管の透視を受けた者は5306名(98.2%)で、その成績を表7に示す。異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男31.6%、女16.7%、平均23.5%とほぼ前年度並みで、その中で要精査とした者は男16.3%、女9.8%、平均12.7%と、同じく前年度と変わらなかった。異常所見を部位別にみると、食道0.8%、胃18.7%、十二指腸2.9%となる。精検受診者は男75.0%、女87.5%、平均80.2%で、ほぼ前年度と変わらず、その結果は表8に示す通りである。発見胃癌は男6名、女4名、計10名で、受診者に対する比率は0.19%と前年度の0.13%より多かつたものの、前々年度までの0.3%に比べるとかなり少なくなっている。これは逐年受診者が大半を占めているからと思われる。進行度別では、早期癌8名、進行癌2名であった。また食道癌(男性)も1名発見された。

その他では胃潰瘍(癒痕)75名(1.4%)、十二指腸潰瘍(癒痕)7名(0.1%)、胃ポリー

プ60名(1.1%)、胃粘膜下腫瘍16名(0.3%)などがみられた。この中で十二指腸潰瘍が少ないのは、十二指腸の有所見者に対して殆ど要精査としていないからである。

### (6) 便潜血反応

受験者は男93.9%、女94.7%、平均94.3%で、前年度と全く同じであった。今回からは老健法に従って、従来までの3日法に代わって2日法とした(当日持参)。検査方法は前年度と同じくOCヘムディア・オート法で、cut off値も150mgとして判定した。2回のうち1回受検者は6.0%で、そのうち陽性者は4.6%、2回受検者は94.0%で、そのうち1回陽性3.6%、2回陽性0.5%であった。以上受検回数にもかかわらず1回でも陽性を示した者は、男5.3%、女3.3%、平均4.1%となり、前年度の8.0%と比べると半減した。これは前年度において、cut off値を100mgとしたため陽性率が著しく高くなったために、8月より150mgとした経過があるからである。この陽性率は、全国での成績が大体5~6%であることからみて<sup>3)</sup>、ほぼ妥当な数字であろう。

表8 上部消化管 精検結果

		受診者数	要精検者数	精検受診者	精検受診率(%)	精検結果内訳(所見数)											
						胃癌	ATP	胃粘膜下腫瘍	胃潰瘍	胃潰瘍癒痕	胃ポリープ	12指腸潰瘍	12指腸潰瘍癒痕	12指腸ポリープ	胃炎	その他	異常なし
~29才	男	39	7	7	100.0%							1					5
	女	13	1	1	100.0%												1
30~39才	男	236	30	22	73.3%				3		2	3			9		5
	女	210	14	13	92.9%					2	2				6		5
40~49才	男	730	117	75	64.1%	1		3	12	6	1	2			25	3	23
	女	895	78	70	89.7%		1	4		3	10				21	2	30
50~59才	男	642	108	85	78.7%			2	12	8	6	2	2	1	33	1	19
	女	913	86	78	90.7%	2		2	4	5	12				21	1	34
60~69才	男	645	111	88	79.3%	4		1	6	8	11	1			38	4	16
	女	780	94	79	84.0%	2		3	2	3	13				25	9	23
70才~	男	143	23	20	87.0%	1		1	1	2	1				7	2	5
	女	61	7	4	57.1%						2						2
計	男	2434	396	297	75.0%	6	0	7	34	24	21	9	2	1	113	10	74
	女	2872	280	245	87.5%	4	1	9	6	11	39	0	0	0	73	12	95
合	計	5306	676	542	80.2%	10	1	16	40	35	60	9	2	1	186	22	169

表9 肝 臓

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	31	15	139	171	362	652	358	576	367	455	90	42	1347	54.3%	1911	65.3%	3258	60.3%
差支えなし		1	3	12	25	89	41	114	65	97	16	8	150	6.1%	321	11.0%	471	8.7%
要再検	3		8	3	22	22	20	47	21	53	13	2	87	3.5%	127	4.3%	214	4.0%
要経過観察	9	2	76	18	260	98	186	121	160	144	20	8	711	28.7%	391	13.4%	1102	20.4%
要精密			12	11	50	45	33	58	36	29	5	6	136	5.5%	149	5.1%	285	5.3%
要治療					6		2		3		1		12	0.5%			12	0.2%
治療中				1	12	2	13	8	8	15	3		36	1.5%	26	0.9%	62	1.1%
合計	43	18	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2925		5404	
有所見者数	12	2	96	33	350	167	254	234	228	241	42	16	982	39.6%	693	23.7%	1675	31.0%
%	27.9%	11.1%	40.3%	15.3%	47.5%	18.4%	38.9%	25.3%	34.5%	30.4%	28.4%	24.2%						
合計%	14	23.0%	129	28.4%	517	31.4%	488	30.9%	469	32.3%	58	27.1%						

表10 肝臓の異常

	アルコール性肝障害		C型肝炎		HBs抗原陽性		その他の肝障害		肝血管腫肝腫瘍		肝のう胞		脂肪肝		肝内結石	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし							38	128			188	271				
要再検			9	26		2	87	107								
要経過観察	297	3	2	1	49	39	45	82	30	22	1	308	242	13	17	
要精密	2		34	40	16	13	36	25	47	71	2	1	1			
要治療	1		2		2		6					1				
治療中	1		12	15	4	1	16	8				3	2			
計	301	3	59	82	71	55	228	350	77	93	188	274	313	245	13	17
%	12.1%	0.1%	2.4%	2.8%	2.9%	1.9%	9.2%	12.0%	3.1%	3.2%	7.6%	9.4%	10.7%	8.4%	0.4%	0.6%
合計%	304	5.6%	141	2.6%	126	2.3%	578	10.7%	170	3.1%	462	8.5%	558	10.3%	30	0.6%

陽性者に対してはここ2～3年以内に精査を受けている者を除いてすべて要精査とした。その結果要精査は、受検者の3.6%、便潜血陽性者の87.4%に当たる。このうち精検受診者は、男55.1%、女78.4%、平均64.6%で、前年度と比べて男性で減少、女性で増加した。この中から男性4名、女性1名、計5名の大腸癌（すべて直腸癌）が発見された。深達度はm2名、pm2名、ss1名である。この5名はいずれも2回検便を受けており、2回共陽性2名、1回のみ陽性3名であった。この成績から大腸癌発見率をみると、受検者の0.1%、便潜血陽性者の2.4%、精検受診者の4.3%に当り、便潜血陽性回数との関係を見ると、2回陽性者の8.7%、1回陽性者の1.6%に癌が発見されたことになる。即ち陽性的中率は2.4

%で、検診効率は良好と云えるだろう。特に、陽性回数が多い人の癌発見率は非常に高いと云える。

### (7) 肝 臓

今回からC型肝炎のスクリーニングを目的としてHCV抗体を全員に実施した。方法は第二世代PA法である。一方HBs抗原陽性者に対して行っていたAFP測定は廃止した。なおGOT、GPT、ALPについては、正常値をやや変更した。

表9に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男39.6%、女23.7%、平均31.0%にみられ、前年度より女性でかなり増加した。その内訳は表10に示す通りである。アルコールによる肝障害と思われる者は、

表11 胆嚢・膵臓の異常

	胆 石		胆のう炎		胆のうポリープ		胆のう腫瘍		胆管拡張		膵 炎		膵 腫 瘍	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし											2			
要 再 検			1						1		4			
要経過観察	28	30	12	6	116	123			4	2	43	53	1	
要 精 密	25	27	5		76	70	7	4	13	15	87	95	5	3
要 治 療														
治 療 中	5	4								1	2	3		
計	58	61	18	6	192	193	7	4	17	19	134	155	6	3
%	2.3%	2.1%	0.7%	0.2%	7.7%	6.6%	0.3%	0.1%	0.7%	0.7%	5.4%	5.3%	0.2%	0.1%
合 計 %	119	2.2%	24	0.4%	385	7.1%	11	0.2%	36	0.7%	289	5.4%	9	0.2%

アルコール性肝障害としたもの（アルコール常用者で主に $\gamma$ -GTPの上昇がみられるもの）と脂肪肝の一部であって、前年度と大差はみられなかった。その他の肝障害は10.7%と前年度とほぼ同じで、この中には、膠質反応の異常のみのケースが最も多く含まれている。

HCV抗体陽性者は男59名（2.4%）、女82名（2.8%）、計141名（2.6%）で、29才以下にはみられず、加齢と共に増加している。これを地域別にみると、滑川市が9.8%（男7.3%、女11.7%）ととびぬけて高い値を示したが、他は2.0%前後であった。滑川市のこの成績から、滑川市全体がC型肝炎ウイルスの高濃度汚染地区と推定されるので、今後滑川市全体としてこの問題について早急に調査を行ない、対策を立てる必要があると考えられる。なおHCV抗体陽性者のうち、男80%、女69%に何らかの肝機能異常が認められ、精査の結果、C型慢性肝炎が確認されたケースもかなりあり、HCV抗体は、潜在性肝疾患の発見に極めて効率的且つ特異性の高い検査であることが示された。なおHB<sub>s</sub>抗原陽性者は2～3%と例年と変わらず、その殆どが肝機能異常を伴わないHBVキャリアと思われる。

一方超音波によって、肝のう胞8.5%、肝血管腫または肝腫瘍疑3.1%、脂肪肝10.3%などがチェックされたが、このうち脂肪肝は前年度よりかなり増加した。これは術者の主観的

判断の影響によるものと思われる。この中で肝腫瘍疑とした中から、女性の転移性肝癌1名が発見された。なお肝腫瘍疑で要精査とした者は44名（男23、女21）で、前述の転移性肝癌1名の他は、血管腫11名、脂肪沈着8名、のう胞3名、異常なし9名、受診せず12名となっている。即ち、血管腫の一部及び部分的な脂肪沈着の中には、腫瘍とまぎらわしい所見を呈するものがあるようである。

#### (8) 胆 嚢

表11に超音波によってチェックされた胆嚢の異常を示す。胆石2.2%、胆嚢ポリープ7.1%などで、ほぼ前年度並みであった。このうち経過観察としたのは、過去に専門医による確認が行なわれている場合で、要精査としたのは、然らざる場合や初めてのケースである。胆嚢腫瘍疑は男7名、女4名、計11名であったが、この中から女性に小さな胆嚢癌（粘膜内癌）が1名発見された。他の10名は、胆石4名、ポリープ2名、線筋症2名、受診せず2名となっている。このうち胆石の2名は手術によって確認されている。

#### (9) 膵 臓

アミラーゼ測定と超音波検査によってチェックしており、その結果を表11に示す。前年度と同じく血清アミラーゼ値131単位以上（男2.3%、女2.6%）または尿アミラーゼ値701単位

以上(男2.7%, 女2.4%)を異常とし、過去に精査を受けていない者に対して要精査一部要再検とした。一方超音波によって、high echo level, 臍管拡張, 石灰化などがチェックされ、経過観察または要精検となった者が若干みられた。また臍腫瘍疑とした者は男5名, 女3名, 計8名であったが、その結果は異常なし4名, 受診せず4名で、臍癌は発見されなかった。

#### (10) 腎・泌尿器

表12に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男7.2%, 女6.2%, 平均6.6%で、前年度よりやや増加した。異常の内訳は表13に示す通りである。蛋白尿は1.2%(男1.5%, 女0.9%), 血尿は7.1%(男3.0%,

女10.6%)で、いずれも前年度よりやや増加した。

一方超音波によって、尿路(腎)結石2.3%, 腎のう胞10.8%, 腎腫瘍疑0.5%などがチェックされ、このうち左腎腫瘍疑とした中から、女性に腎癌が1名発見された。なお腎腫瘍疑で要精査とした者は男14名, 女11名, 計25名であったが、上述の腎癌1名の他は、のう胞9名, 血管脂肪腫1名(生検で確認), 腫瘍疑1名, 異常なし6名, 受診せず7名となっている。腎のう胞は非常に頻度の多いものであるが、腫瘍とまぎらわしい所見を呈するものも若干あるようである。

#### (11) 血液

成績を表14に示す。異常なし、差し支えな

表12 腎・泌尿器

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	40	16	222	177	646	709	525	761	446	589	84	46	1963	79.2%	2298	78.6%	4261	78.9%
差し支えなし		2	8	28	46	141	73	111	161	151	49	14	337	13.6%	447	15.3%	784	14.5%
要再検	2		1		3	4	9	2	4	1	2		21	0.8%	7	0.2%	28	0.5%
要経過観察	1		5	8	34	45	34	44	38	40	12	3	124	5.0%	140	4.8%	264	4.9%
要精密			2	2	6	4	8	5	8	7	1	3	25	1.0%	21	0.7%	46	0.9%
要治療				1	2	5	3	1	3	5			8	0.3%	12	0.4%	20	0.4%
合計	43	18	238	216	737	908	652	924	660	793	148	66	2478		2925		5403	
有所見者数	3		8	11	45	58	54	52	53	53	15	6	178	7.2%	180	6.2%	358	6.6%
%	7.0%		3.4%	5.1%	6.1%	6.4%	8.3%	5.6%	8.0%	6.7%	10.1%	9.1%						
合計%	3	4.9%	19	4.2%	103	6.3%	106	6.7%	106	7.3%	21	9.8%						

表13 腎・泌尿器異常

	蛋白尿		血尿		尿路結石 腎結石		腎のう胞		腎腫瘍		腎・泌尿器 その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差し支えなし	3	2	8	271			368	212				
要再検	9	5	11	1							1	1
要経過観察	25	19	55	36	40	35	2		2	1	9	57
要精密				1	2	1	2	1	14	11	8	8
要治療					1	1	4				6	6
計	38	27	75	311	42	81	372	213	16	12	24	72
%	1.5%	0.9%	3.0%	10.6%	1.7%	2.8%	15.0%	7.3%	0.6%	0.4%	1.0%	2.5%
合計%	65	1.2%	386	7.1%	123	2.3%	585	10.8%	28	0.5%	96	1.8%



表14 血 液

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	39	17	213	184	605	742	527	867	599	745	129	60	2157	87.0%	2615	89.4%	4772	88.3%
差支えなし	4		24	3	102	26	57	16	34	9	7		228	9.2%	54	1.8%	282	5.2%
要再検			1	3	6	1	3	2		1			10	0.4%	7	0.2%	17	0.3%
要経過観察		1		18	21	104	18	33	22	32	11	5	72	2.9%	193	6.6%	265	4.9%
要精密							2		2	1		1	4	0.2%	2	0.1%	6	0.1%
要治療				8	1	30	1	6	2	2	1		5	0.2%	46	1.6%	51	0.9%
治療中					2	5			1	3			3	0.1%	8	0.3%	11	0.2%
合計	43	18	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2925		5404	
有所見者数		1	1	29	30	140	24	41	27	39	12	6	94	3.8%	256	8.8%	350	6.5%
%		5.6%	0.4%	13.4%	4.1%	15.4%	3.7%	4.4%	4.1%	4.9%	8.1%	9.1%						
合計%	1	1.6%	30	6.6%	170	10.3%	65	4.1%	66	4.5%	18	8.4%						

しを除く異常所見者は、男3.8%、女8.8%、平均6.5%にみられ、ほぼ前年度並みであった。異常の大部分を占めるのは例年通り女性の貧血で、Hb 11.9g/dl以下は14.3%、11.5g/dl以下は8.5%で、前年度と大差はみられなかった。これを年代別にみると、49才以下14.1%、50才以上4.3%と若年者に圧倒的に多いのは例年と同じである。

その他では白血球増加(9000/㎥以上)5.7%、白血球減少(3000/㎥以下)0.3%、血小板減少( $13 \times 10^4$ /㎥未満)0.3%などがみられた。

## (12) 甲状腺

医師の触診によって甲状腺腫大とされたものは、びまん性甲状腺腫が男2.1%、女16.0%、結節性甲状腺腫が男0.2%、女1.9%、計、男2.3%、女17.9とほぼ前年度並みにみられた。この中で、結節性甲状腺腫で要精査とした中から、男性に甲状腺癌が1名発見された。

## (13) 糖・代謝

今回から糖代謝異常のスクリーニング効率を高める目的で、HbA<sub>1c</sub>を全員に実施した。表15に示す通り、異常なし、差し支えなしを除く異常所見者は、男18.2%、女9.2%、平均13.3%で、前年度と比べると男性でかなり減

少した。その内訳は表16に示す通りである。先ず糖尿病のスクリーニングは、従来までは空腹時血糖のみで偽陰性ないし偽陽性が多く、糖負荷試験が実施できない日帰りドックでは決定的な方法がなかったが、HbA<sub>1c</sub>を加えることによって多少その効率を高めることができたと考えている。以下にその成績を述べると、空腹時血糖111mg/dl以上は、男12.5%、女6.6%、平均9.3%で、前年度と殆ど同じであった。一方HbA<sub>1c</sub>5.8%以上は、男188名、7.6%、女102名、3.5%、平均5.4%であった。

次に、空腹時血糖111mg/dl以上で且つHbA<sub>1c</sub>5.8%以上つまり糖尿病の確立が高い者は、空腹時血糖111mg/dl以上の中の37.2% (男39.2%、女33.9%)にすぎなかった。これに対して、HbA<sub>1c</sub>5.8%以上で且つ空腹時血糖111mg/dl以上の者は、HbA<sub>1c</sub>5.8%以上の中の64.5% (男64.9%、女63.7%)であった。HbA<sub>1c</sub>5.8%以上で且つ空腹時血糖110mg/dl以下の者、つまりHbA<sub>1c</sub>をスクリーニング基準とした場合の偽陽性と思われる者は35.5% (男35.1%、女36.3%)で、そのうち胃切除を受けた者は19.4%と予想以上に少なかった。今回のHbA<sub>1c</sub>を参考にして、空腹時血糖、HbA<sub>1c</sub>両者共高値の場合は当然要精査とし、空腹時血糖111～140mg/dlで

HbA<sub>1c</sub>が5.7%以下の場合、肥満や糖尿病の家族歴があれば要精査，なければ要観察とした。空腹時血糖110mg/dl以下でHbA<sub>1c</sub>5.8%以上の場合、胃切除あれば特に問題なく，肥満や家族歴があれば要精査，なければ要観察とした。いずれにしても空腹時血糖111~120mg/dlの軽度上昇が意外に多く判断に迷うところであるが，肥満度が高くHbA<sub>1c</sub>5.0%以上の場合、少なくとも耐糖能異常を呈するケースが多いので，一度糖負荷試験を実施しておいた方が望ましいと思われる。

一方，高尿酸血症（7.1mg/dl以上）は男10.0%，女0.3%と前年度と大差はないが，性差が大きいため，今回から男7.7mg/dl，女6.1mg/dl以上を異常値とした。その結果表17に示す通り，男5.7%，女1.7%，平均3.6%に異常がみられた。

なお，高γ-グロブリン血症あるいは血清蛋白異常を示した中から，男女各1名，計2名の多発性骨髄腫が発見された。

#### (14) 血清脂質

表17は血清脂質の成績を示したものである。総コレステロール，中性脂肪及びHDLコレステロールのいずれかが異常を示した者は，男45.0%，女37.8%，平均41.1%で，前年度と比べると男性でやや増加，女性でかなり減少した。これを年代別にみると，男性では39才以下47.3%，40才台50.5%，50才台46.9%，60才以上37.7%と，40才台をピークにほぼ全年代に平均してみられるのに対し，女性では39才以下11.5%，40才台27.5%，50才台43.7%，60才以上49.5%と，50才以降急増しているのが特徴で，これは後述するように，男性

表15 糖・代謝

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	40	17	206	205	584	839	512	810	522	684	124	57	1988	80.2%	2612	89.3%	4600	85.1%
差支えなし			3	1	8	16	10	11	13	14	6	2	40	1.6%	44	1.5%	84	1.6%
要再検			1		6	1	4	4	6	3			17	0.7%	8	0.3%	25	0.5%
要経過観察	2	1	20	8	81	38	56	58	60	56	6	4	235	9.1%	165	5.6%	390	7.2%
要精密	1		2	1	19	7	19	20	14	12	2	2	57	2.3%	42	1.4%	99	1.8%
要治療			2		14	3	27	4	7	4	2		52	2.1%	11	0.4%	63	1.2%
治療中			4	1	25	4	25	17	38	20	8	1	100	4.0%	43	1.5%	143	2.6%
合計	43	18	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2925		5404	
有所見者数	3	1	29	10	145	53	131	103	125	95	18	7	451	18.2%	269	9.2%	720	13.3%
%	7.0%	5.6%	12.2%	4.6%	19.7%	5.8%	20.1%	11.1%	18.9%	12.0%	12.2%	10.6%						
合計%	4	6.6%	39	8.6%	198	12.0%	234	14.8%	220	15.1%	25	11.7%						

表16 糖代謝異常

	糖尿病		高血糖		耐糖能障害		高尿酸血症		高r-gl血症		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし			27	20	2				10	27	6	1
要再検	2	1	13	7			2					
要経過観察	21	10	84	70	20	10	104	51	5	31	4	1
要精密	37	21	18	14	3	5				2		
要治療	44	11					8					
治療中	69	39	3		1	2	28			2		
計	173	82	145	111	26	17	142	51	15	62	10	2
%	7.0%	2.8%	5.8%	3.8%	1.0%	0.6%	5.7%	1.7%	0.6%	2.1%	0.4%	0.1%
合計%	255	4.7%	256	4.7%	43	0.8%	193	3.6%	77	1.4%	12	0.2%

に多い高中性脂肪血症と高年女性に多い高コレステロール血症を反映した成績である。

次にこれを各脂質別にみると、コレステロールのみ高値は表18に示すように、男11.2%、女23.8%、平均18.0%で、男女共前年度とほぼ同じであった。次に中性脂肪のみ高値は表

19に示すように、男18.2%、女5.5%、平均11.3%で、前年度とほぼ同じであった。両者共高値は表20に示すように、男8.2%、女5.6%、平均6.8%で、男女共前年度より減少した。結局高コレステロール血症は、男19.4%、女29.5%、平均24.9%となり、前年度と比べて

表17 血清脂質

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	28	17	120	190	365	658	347	520	411	393	92	41	1363	55.0%	1819	62.2%	3182	58.9%
差支えなし			3	2	6	2	8	7	5	5			22	0.9%	16	0.5%	38	0.7%
要再検										1						0.0%	1	0.0%
要経過観察	15	1	111	24	344	239	284	363	239	340	53	19	1046	42.2%	986	33.7%	2032	37.6%
要精密																		
要治療			4		15	4	8	9	3	12	1		31	1.3%	25	0.9%	56	1.0%
治療中					7	5	6	25	2	42	2	6	17	0.7%	78	2.7%	95	1.8%
合計	43	18	238	216	737	908	653	924	660	793	148	66	2479		2925		5404	
有所見者数	15	1	115	24	366	248	298	397	244	395	56	25	1094	44.1%	1090	37.3%	2184	40.4%
%	34.9%	5.6%	48.3%	11.1%	49.7%	27.3%	45.6%	43.0%	37.0%	49.8	37.8%	37.9%						
合計%	16	26.2%	139	30.6%	614	37.3%	695	44.1%	639	44.0%	81	37.9%						

表18 高コレステロール血症単独

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし				1				3							4	0.1%	4	0.1%
要再検										1					1	0.0%	1	0.0%
要経過観察	4	1	25	14	84	153	77	244	67	224	15	12	272	11.0%	648	22.2%	920	17.0%
要精密																		
要治療			1		2	1	2	5	1	7			6	0.2%	13	0.4%	19	0.4%
治療中						3		9		14		5			31	1.1%	31	0.6%
計	4	1	26	15	86	157	79	261	68	246	15	17	278	11.2%	697	23.8%	975	18.0%
%	9.3%	5.6%	10.9%	6.9%	11.7%	17.3%	12.1%	28.2%	10.3%	31.0%	10.1%	25.8%						
合計%	5	8.2%	41	9.0%	243	14.8%	340	21.6%	314	21.6%	32	15.0%						

表19 高中性脂肪血症単独

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし			3	1	10	4	10	5	9	8	3		35	1.4%	18	0.6%	53	1.0%
要再検																		
要経過観察	10		44	2	148	35	110	43	82	47	13	1	407	16.4%	128	4.4%	535	9.9%
要精密																		
要治療					2	1	3						5	0.2%	1	0.0%	6	0.1%
治療中					2	1		5	1	7			3	0.1%	13	0.4%	16	0.3%
計	10		47	3	162	41	123	53	92	62	16	1	450	18.2%	160	5.5%	610	11.3%
%	23.3%		19.7%	1.4%	22.0%	4.5%	18.8%	5.7%	13.9%	7.8%	10.8%	1.5%						
合計%	10	16.4%	50	11.0%	203	12.3%	176	11.2%	154	10.6%	17	7.9%						

大差はなく、高中性脂肪血症は、男26.4%、女11.1%、平均18.1%となり、これも前年度と比べて大差はみられなかった。一方低HDLコレステロール血症は表21に示すように、男17.5%、女5.8%、平均11.2%で、前年度と比べると男性ではかなり増加し、女性では約3分の1に著減した。

以上高コレステロール血症は、女性では50才以降に著しく増加するが、男性ではどの年代にも平均してみられる。一方高中性脂肪血

症は、男性では高齢になるに従って減少するのに対し、女性では逆に高齢になるほど増加する傾向が見られる。これは性ホルモンなど性差そのものの他に、食事、飲酒、喫煙、肥満、運動などライフスタイルの違いによってもたらされるものと考えられる。

脂質異常を前年度と比べると、高コレステロール、高中性脂肪両者共殆ど変わらず、これに対して低HDLコレステロールだけが男性で増加、女性で減少した。

表20 高コレステロール血症+高中性脂肪血症

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%	
差支えなし																			
要再検査																			
要経過観察			25	3	65	17	47	51	29	44	4	5	170	6.9%	120	4.1%	290	5.4%	
要精密検査																			
要治療			3		11	2	5	4	2	5	1		22	0.9%	11	0.4%	23	0.6%	
治療中					5	1	4	11	1	21	2	1	12	0.5%	34	1.2%	46	0.9%	
計			28	3	81	20	56	66	32	70	7	6	204	8.2%	165	5.6%	369	6.8%	
%			11.8%	1.4%	11.0%	2.2%	8.6%	7.1%	4.8%	8.8%	4.7%	9.1%							
合計%			31	6.8%	101	6.1%	122	7.7%	102	7.0%	13	6.1%							

表21 低HDLコレステロール血症

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%	
差支えなし																			
要再検査																			
要経過観察	7		45	5	135	45	116	57	99	62	31	2	433	17.5%	171	5.8%	604	11.2%	
要精密検査																			
要治療																			
治療中																			
計	7		45	5	135	45	116	57	99	62	31	2	433	17.5%	171	5.8%	604	11.2%	
%	16.3%		18.9%	2.3%	18.3%	5.0%	17.8%	6.2%	15.0%	7.8%	20.9%	3.0%							
合計%	7	11.5%	50	11.0%	180	10.9%	173	11.0%	161	11.1%	33	15.4%							

表22 年代別肥満度

標準体重比	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
-21%以下		3	7	5	17	16	7	11	25	26	16	5	72	2.9%	66	2.3%	138	2.6%
-11～-20%	7	7	30	57	79	127	83	103	123	115	38	19	360	14.5%	428	14.6%	788	14.6%
-10～+10%	24	7	143	114	458	557	411	584	409	482	73	33	1518	61.2%	1777	60.8%	3295	61.0%
+11～20%	7		36	20	127	134	112	156	79	120	17	5	378	15.2%	435	14.9%	813	15.0%
+21～30%	3		17	13	45	43	35	50	19	39	4	3	123	5.0%	148	5.1%	271	5.0%
+31%以上	2	1	5	7	11	31	5	20	5	11		1	28	1.1%	71	2.4%	99	1.8%

### (16) 肥 満

前年度と同じく、明治生命の標準体重表<sup>4)</sup>との比率で肥満度を表わした。その成績を表22に示す。標準体重比+11%以上の肥満者は、男21.3%、女22.4%、平均21.9%にみられ、前年度より僅かに減少した。これを年代別にみると、男性では50才まではほぼ平均してみられるが、60才以降はかなり減少するのに対し、女性では40才～60才台をピークに、39才以下と70才以上では著しく少なくなっている。一方標準体重比-11%以下の“やせ”は、男17.4%、女16.9%、平均17.1%にみられ、前年度より特に女性において増加した。

### (17) 眼 底

表23に示すように、異常なし、差し支えな

しを除く異常所見者は、男23.5%、女19.4%、平均21.3%で、前年度より著しく増加した。これは判定医が交代したためと思われる。主なものとして高血圧性眼底5.0%、動脈硬化性眼底9.6%、乳頭陥凹5.0%、乳頭コーヌス2.9%、網脈絡膜の異常では、白斑4.5%、萎縮2.7%、出血1.9%、変性0.7%などで、また糖尿病性網膜症は25名(0.5%)であった。

### (18) 乳 腺

従来通り、外科医による触診と超音波断層撮影との併用で実施した。表24に示す通り7.6%に異常がみられ、前年度と大差はみられなかった。その内訳は、乳腺症(疑)6.3%、良性乳腺腫瘍(疑)2.1%などで、乳癌は発見されなかった。

表23 眼 底

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	37	16	208	193	571	745	418	662	324	400	55	22	1613	66.2%	2038	71.2%	3651	68.9%
差し支えなし	2		7	9	43	52	72	73	107	128	20	8	251	10.3%	270	9.4%	521	9.8%
要再検							1						1	0.0%			1	0.0%
要経過観察	3	1	15	8	91	90	130	149	185	183	50	16	474	19.4%	447	15.6%	921	17.4%
要精密	1	1	4	4	19	16	18	18	17	29	7	7	66	2.7%	75	2.6%	141	2.7%
要治療			1		3		3	2	1	2	2	1	10	0.4%	5	0.2%	15	0.3%
治療中					4		4	7	13	16	2	4	23	0.9%	27	0.9%	50	0.5%
合計	43	18	235	214	731	903	646	911	647	758	136	58	2438		2862		5300	
有所見者数	4	2	20	12	117	106	156	176	216	230	61	28	574	23.5%	554	19.4%	1128	21.3%
%	9.3%	11.1%	8.5%	5.6%	16.0%	11.7%	24.1%	19.3%	33.4%	30.3%	44.9%	48.3%						
合計%	6	9.8%	32	7.1%	223	13.6%	332	21.3%	446	31.7%	89	45.9%						

表24 乳 房

	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計	%
異常なし	15	192	787	869	775	64	2702	92.4%
差し支えなし				1			1	0.0%
要再検		5	14	4	2		25	0.9%
要経過観察	3	12	71	23	5	2	116	4.0%
要精密		7	34	28	11		80	2.7%
要治療								
治療中				1			1	0.0%
合計	18	216	908	924	793	66	2925	
有所見者数	3	24	120	55	18	2	222	
%	16.7%	11.1%	13.2%	6.0%	2.3%	3.0%	7.6%	

### (19) 婦人科

前年度と同様に、内診、子宮頸部細胞診、一部子宮体部細胞診、経膈卵巣エコーを行なった。2783名(95.2%)が受検し、その成績は表25に示す通りである。異常所見がみられたのは8.0%で、前年度よりやや少なかった。その内訳は表26に示す通り、膣炎2.8%、子宮筋腫2.4%、卵巣腫瘍(疑)1.4%などである。子宮頸部細胞診 classⅢ以上が13名みられ、その中でclassⅢaであった1名に0期の子宮頸癌が発見された。その他のclassⅢa 11名は再検の結果、classⅢa 1名、classⅡ 7名、classⅠ 1名、受診せず2名となっており、またclassⅢbの1名はclassⅣであったが、いずれもそのままfollow upとなっている。

### (20) 視力・聴力

全員測定を行なっているが、判定は行っていない。

### (21) その他

例年と同じく、皮膚病、頸部リンパ節腫大などが若干みられたのみであった。

### ま と め

(1) 癌は胃癌10名、食道癌1名、大腸癌5名、肺癌2名、胆嚢癌1名、転移性肝癌1名、腎癌1名、甲状腺癌1名、子宮癌1名並びに多発性骨髄腫2名、計25名発見された。

(2) 発見胃癌は10名で、発見率0.19%となり、昨年に引き続き低率であった。継続受診者が大部分を占めているのが一因と考えられる。その80%は早期癌で、進行癌であった2名のうち1名は前回チェックミスであり、もう1名は前回精検未受診であった。

(3) 大腸癌は5名と、今回も胃癌について多く発見されている。今後年々発見率が増加することが予想されるが、その効果を上げるためにも、精検受診率を高める努力が必要で

表25 婦人科

	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計	%
異常なし	4	181	728	849	741	57	2560	92.0%
差支えなし		3	2	2			7	0.3%
要再検			2	18	8	3	31	1.1%
要経過観察	1	9	54	20	18	2	104	3.7%
要精密	1	9	32	23	9		74	2.7%
要治療			6	1			7	0.3%
治療中								
合計	6	204	840	903	771	59	2783	
有所見者数	2	20	110	52	30	2	216	
%	33.3%	9.8%	13.1%	5.8%	3.9%	3.4%	7.8%	

表26 婦人科異常

	膣炎	頸管ポリープ	子宮筋腫	卵巣腫瘍	細胞診クラス3以上	その他
差支えなし			5			2
要再検						
要経過観察	2	1	20	7		4
要精密	4	17	35	30	13	13
要治療	73	2				
治療中			6	1		
計	79	20	66	38	13	19
%	2.8%	0.7%	2.4%	1.4%	0.5%	0.7%

あろう。

(4) 腹部超音波検診によって、胆嚢癌、転移性肝癌、腎癌の各1名が発見された。超音波による発見癌は前年度の2名に引き続いてであり、それなりに評価できると思われる。今後益々術者（技師）のレベルアップに努めて、精度の高い検診を実施していきたい。

(5) 今回からHCV抗体検査を実施し、C型肝炎感染の実態が浮かび上がった。云うまでもなく肝細胞癌の大部分において、その背景にC型肝炎の存在があり、スクリーニングの意義は大きい。今回の成績から、潜在性慢性肝疾患の発見に、HCV抗体が極めて効率のよい検査であることが確認された。

(6) 糖尿病ないし糖代謝異常のスクリーニングの補助手段として今回からHbA<sub>1c</sub>を導入したが、空腹時血糖のみに頼っていた従来の方式に比べて、より一層精度が高く効率的な判定や指示が可能になったと考えている。

(7) 脂質異常のパターンは従来と余り変わらなかったが、低HDLコレステロール血症のみが前年度と比べて男性でかなり増加し、女性で著減した理由は不明である。今後の経過をみて、あるいはその背景因子を検討する

必要があるかもしれない。

(8) 二次検診の状況をまとめると、要二次検診は男1074人、1464件、女1259人、1685件、合計2333人、3149件で、そのうち受検したのは男717人（66.8%）、981件（67.0%）、女1036人（82.3%）、1362件（80.8%）、合計1753人（75.1%）、2343件（74.4%）であった。これを前年度とくらべると、人数、件数共男性でやや減少したが、女性では殆ど変わらなかった。一方受検者は男女共増加した。結果は、異常なし・差し支えなし41.6%、経過観察40.4%、要治療15.9%、その他2.1%で、例年とほぼ同じ傾向であった。

## 文 献

- 1) 小川忠邦ほか：平成4年度日帰り人間ドックの成績，富農医誌，25：23～37，1994.
- 2) 肺癌細胞診判定基準改定委員会報告：肺癌，23：653，1983.
- 3) 平成3年度消化器集団検診全国集計資料集：269～307，1993.
- 4) 塚本 宏ほか：死亡率からみた日本人の体格，厚生指針，33：3，1986.